

Title	南部家文書(吉野朝史蹟調査會編輯並發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.2 (1940. 9) ,p.171(373)- 171(373)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

南部文書

(吉野朝史蹟調査會
編輯並發行)

本書は山梨縣身延町住の男爵南部日實氏傳襲の古文書を各時代に互つて採録し且つ同文書の參考として諸家寺院所傳の文書若干を收載し、更に南部男爵家に流入保藏の曾我氏文書を合載し、卷末に八戸家系、八戸家傳記を附收したものである。

抑も南部家は源義光の孫光行、甲斐國南部莊を領したるを以て南部氏と稱し、其の三男實長分れて一家を成し、波木井郷等を領有し鎌倉幕府の家人となり、適々日蓮に歸依し、後、身延山に延請し、その教化を崇信し子孫其の地に繁榮し、元弘建武の亂世、其の後裔一族甲斐より躍然として京都に馳參じ、錦旗の下に忠勤を抽んじ、鎮守府大將軍北畠顯家皇子義良親王を奉じ陸奥に下向するや、南部師行は顯家を輔け國司代として八戸に鎮し、顯家の西上に隨ひ和泉石津に於ける合戦には主従共に壯烈なる戦死を遂げ、其の後、弟政長は遺志を繼ぎ八戸に残り、強敵曾我氏を擊攘し大功を樹てしを始め子孫一族よく父祖の遺訓を遵守し、一意吉野朝に忠誠を致しその事績燦然として青史に光彩を放つて居る。八代政光の時、本貫甲斐國を去つて八戸に居を移し、三十二代直榮の時、遠野(岩手縣)に移りしも、現時一族は甲斐國に歸住せ

られてゐる。かく再三移封のことあり、又幾多世相の變遷ありしが、子孫よくこの重要文書を護持し今日に至りしは寔に感服し至上の追孝と稱すべきである。かの九州北端の五條男爵家文書と陸奥北端のこの南部家文書とは實に我が國土兩端僻遠の地に於ける勤王諸士の業績を千載に傳ふる不朽の史料と云ふべきである。明治九年七月東北御巡幸の砌、南部家文書は畏くも天覽に供へられ更に明治三十年後裔行義は祖先の忠節嘉せられて特に男爵を賜はる無上の光榮に浴したのである。

昭和十二年創立の吉野朝史蹟調査會にては豫て東國地方の史料史蹟の研究と顯彰に當りしに、昨年醍醐天皇六百年の御祭典に際會せしを以て、本書の上梓を企劃したものと云ふ。本書中、特筆すべきは元弘より元中に至る六十年間、南部氏子々孫々五代相承けて僻地に孤忠を守り堅節を完うし屢々歡感を忝うし、厚き恩賞を拜せしを證する繪旨國宣等數十通である。就中、後醍醐天皇の安堵繪旨、後村上天皇の髻繪旨等は一族年來の軍忠を深く嘉賞あらせられしもので、降つて朝鮮陣に際し秀吉に隨從して九州に至りし南部信直の同地よりの書狀數通は文祿役當年に於ける旺盛なる志氣を想見すべきものである。又曾我氏文書は鎌倉時代陸奥に蟠居せし一族の勢威を語る史料である。

終りに南部男爵家の繁榮を祈り併せて吉野朝史蹟調査會に敬意を表する次第である。(昭和十五年五月廿二日、武田勝藏)

日本の數學

(小倉金之助著
岩波書店發行)